

第33回泌尿器科中部連合総会シンポジウム

「副甲状腺機能亢進症の外科」

司会：和歌山県立医科大学泌尿器科学教室（主任：大川順正教授）

大 川 順 正

司会のことば

尿路結石症は、泌尿器科における主要疾患のひとつであり、かつ、古代から人類の歴史とともに存在して来たといわれるほどの疾患でありながら、その原因については、いまだに 解明されては おらない 難病であり、多くの研究者たちがその再発予防に向けて努力を続けているところである。他方、尿路結石を惹起する原因または誘因疾患については、以前より多くの研究成果が報告され、それぞれの患者について、その原因に対する治療がなされて来ている。原発性副甲状腺機能亢進症は、この原因疾患のひとつとして位置づけされ、かつ、外科的に病的副甲状腺を摘出することによ

って、尿路結石の原因を断ち切りうるという、きわめて興味深い疾患といえることができる。

原発性副甲状腺機能亢進症は、従来より、比較的まれな疾患とされてきているが、最近になって、血清カルシウム濃度測定が自動化とともに日常化され、このために高カルシウム血症の診断から多くの原発性副甲状腺機能亢進症の患者が発見されるようになってきた。泌尿器科領域でも、本症に対する認識がより一層上昇するものとして期待されるところである。以下、本シンポジウムで、各演者が報告、討論した内容を記載していただくことにした。これらの論文がなんらかの参考になることを期待したい。